政治的価値と芸術的価値

マルクス主義文学理論の再吟味

平林初之輔

一

コペルニクスは地動説をとなへたが、それを統一的理論によつて説明するためにはニユウトンをまたねばならなかつた。ところが今日の小学生は万有引力の公式を知つてゐる。だからコペルニクスよりも二十世紀の小学生の方がすぐれてゐる！

石造建築は木造建築よりも進んだ建築である。某々洋食店は石造建築である。法隆寺は木造建築である。だから、某々洋食店の建築は法隆寺の建築よりもすぐ

れてゐる！

これ等の論理には矛盾がない。だがこの理論からひき出された判断は、必らずしも私たちを首肯せしめない。その理由は説明するまでもなく、誰でもちよつと考へて見ればわかることである。

ところが、次のやうな命題にぶつゝかると問題はそれ程簡単ではない。

ダンテの作品にはプロレタリア的イデオロギイが含まれてゐない。シンクレアの作品はプロレタリア的イデオロギイに貫かれてゐる。だから、ダンテの作品は、芸術的にシンクレアの作品よりも劣つてゐる！

もしダンテがあまりに古すぎるなら、これをトルストイとおきかへても、ユゴオとおきかへても、ストリンドベルヒとおきかへてもよい。

然り！　と或る人はこれに賛成して、答へるであらう。芸術作品の価値は、その作品のもつイデオロギイによつて決定される。プロレタリアの勝利のために利益をもたらすものにのみ芸術作品の価値がある！

否！　とある人は答へるであらう。イデオロギイは芸術作品の全価値を決定する要素ではない。そしてプロレタリアの勝利のために、貢献するといふことは、芸術本来の性質とは没交渉である！

この二つの見方は、最近、マルクス主義文学理論と正統派文学理論とを尖鋭に対立させたのみでなく、マルクス主義文学理論の陣営内に於ても意見の分裂を生ぜしめてゐる問題の焦点である。他の芸術の場合はしばらくおいて、文学作品の評価の基準についての最近の諸議論は、悉くこの問題を中心としてまき起されてゐるやうに思はれる。

かやうな簡単な問題が、どうして、それ程多くの議論を生むに至つたかは、多くの人々には全く不思議に思はれるであらうが、それにも拘らずこれは事実なのである。

私は、この不思議は、マルクス主義作家若しくは批評家は、彼がマルクス主義者であると同時に作家であり批評家であるといふ二重性のためにするのだと考へる。マルクス主義者が文学作品を評価する基準は、あくまでも政治的、教育的の基準であり、作家若しくは批評家が文学作品を評価する基準は、芸術的基準である。この二つの基準を調節し、統一しようとする試みに於てマルクス主義批評家若しくは作家の、新しい努力が生れ、そこにさま〴〵な意見の分裂が生れたのである。大衆文学の問題の如きもその一つのあらはれに過ぎない。

マルクス主義は、単なる政治学説でも、経済学説でもなくて一の世界観である。若しさういふ言葉を用ゐてもよいならば一の哲学である。従つて、それは、人間界の凡ゆる現象に対して、統一的な解釈、「見方」をもつべきものであることは無論である。だが、この「もつべきものである」といふことは、現実に、完成された姿でそれを現在もつてゐるといふことゝはちがふ。マルクス主義者の任務は、一の完成された法典を与へられて、凡ての事象を、それに照らして判断してゆく司法官の任務とは全く異つて、この法典を日常の闘争を通じて自らつくつてゆくことであるのである。文芸

作品の評価といふやうな問題については、無論私たちはまだ「原理はもうできあがつた。あとはその応用のみである」といふ風な完全な法典を現在与へられてをらぬし、また未来永劫さういふものゝ与へられる気遣ひはないであらう。それは単に、すぐれたマルクス主義者には、もつとほかに重大な仕事があるからといふ理由からばかりではなくて、問題の性質上与へられ得ないのである。

ところが、こゝに一群の人々がある。それ等の人々は、この政治的価値と芸術的価値とは二つの直線のやうに、全く重ね合はせることができると考へるのであ

る。勝本清一郎氏はそれを「社会的価値」といふ名前で呼んでゐる。そして社会的価値は同時に芸術的価値であり、社会的価値のほかに芸術的価値ありと思ふのは一の迷妄であるとして、芸術的価値といふものを全く解消してしまつた。蔵原惟人氏も、この一元観に関する限りに於いては勝本氏と同意見であるやうに思はれた。

註　勝本氏の三田文学に於ける、及び蔵原氏の朝日新聞に於ける論文をさすのであるが、いまそれを参照してゐるひまがないので、私の読みちがひであつたら、両氏にお詫びする次第

であるが、私のこの論文は両氏の議論と独立によまれても些しも理解を妨げるものでない。

マルクス主義は一の世界観ではあるけれども、最もさしせまつた目的としては、組織されたプロレタリアによるブルジョア政権の奪取といふ政治の一点に、プロレタリアの凡ての力が集中されることを要求する。だから文学、芸術もこの政治的目的を達するための手段とされねばならぬのである。文学作品は、この視角から見たとき、直接間接の宣伝もしくは煽動の手段としてしか意味がない。これは、政治的に全く正しい解

釈である。だから、マルクス主義政党の芸術に関するプログラムに於て、芸術作品の価値は、それがプロレタリアの勝利に貢献する程度の大小によつて評価されねばならぬと規定されることは甚だ当然である。そして、党は、党員たる作家や批評家に、その趣旨を伝達し、また命令することも当然である。芸術は手段ではないとか、文学は宣伝の道具ではないとかいふことを、芸術や文学の立場から絶叫したつて無益である。プロレタリアの解放、勝利といふことが絶対だからである。

　マルクス主義批評家にとつての作品評価の根本規準は、それ故に純然たる政治的規準である。マルクス主

義作家及び批評家はまづこの規準を認めなければならない。彼がどんなにすぐれた批評家や作家であつても、この根本規準を拒絶する刹那に、彼はマルクス主義作家でも批評家でもなくなる。何となれば、彼は芸術家であり、批評家である以前にマルクス主義者でなければならぬからである。芸術的価値は、彼にとつては政治的必要に従属せしめられねばならぬからである。

実際の作品、たとへばチエホフの作品を例にとらう。チエホフがすぐれた作家であつたことはほとんど異論のない事実である。だが彼の作品は、革命の擁護といふ政治的必要からは、好ましからぬ作品であるかも知

れぬ。若しさうである場合には、彼の劇がマルクス主義批評家によつて手厳しく批難され、その上演がプロレタリア国家権力によつて禁止されることはあり得る。そしてこの禁止は、政治的に全く正当である。だが、この政治的形勢の変化によりて、国家権力の命令や、政党の決議によつて、チエホフの作品の芸術的価値が、一夜のうちに消えてなくなつてしまふであらうか？

否！　と私は答へる。また誰だつてさう答へざるを得ないと私は考へる。チエホフの作品でなしに、たとへば、ボオドレエル若しくはエドガア・アラン・ポオの作品を例にとらう。これ等の人々の作品は、プロレ

タリアの勝利に貢献するやうな何物をもつてゐないことは誰しも異存のないところである。それどころか、これ等の人々は作品には、一般に人類の幸福をおしすゝめる拍車となるやうなものすら何一つ見当らぬ。それにも拘らず、これ等の作家は、芸術的に何等価値のない作家であるといはれるだらうか？　これ等の作家によつて描かれた頽廃性、不健康性はプロレタリアの闘争のためには無論のこと、一般に人類の向上進歩のためにすら反効果をもつものであるのに、私たちが、それ等の作品に、多かれ少なかれ芸術的価値を認めるのは何故であらうか？

こゝに一元論をもつては解釈しがたい謎がある。

性急な読者は、私がこゝで、芸術作品の政治的価値を否定、若しくは減弱しようとする意図を抱いてゐるために、かういふ議論をするのだと考へるかも知れない。ところが、私の意図はその反対である。私は文学作品の政治的価値を正しく認識するために、そしてその重要性を立証するために、先づこれを芸術的価値から引きはなすのである。若しこれを一しよくたにして「社会的価値」といふ風呂敷の中にひつくるめてしまふことができるならば、プロレタリア文学とかマルクス主義文学とかいふものゝ特殊性は消滅してしまはね

ばならぬ。

プロレタリア文学若しくはその別名或はその一部分としてのマルクス主義文学は、政治的規定を与へられた文学である。政治のヘゲモニイのもとにたつ文学である。この事実はあいまいにごまかしたり、糊塗したりしてはならない。芸術や文学から出発して、マルクス主義文学、プロレタリア文学を合理化しようとする企図はきれいさつぱりと抛棄されねばならぬ。マルクス主義は芸術や文学を社会の現象として解釈することはできるが、芸術や文学はマルクス主義から命令され規定されて、政治的闘争の用具となる約束を少しもも

つてゐないからである。プロレタリア文学若しくはマルクス主義文学のみがそれをもつてゐるに過ぎないのである。プロレタリア文学は芸術の立場ではなくて政治の立場から、文学論からではなくて政治論から出発してのみ合理化されるのである。

この関係は、ルナチヤルスキーの場合ですら、紛飾され、婉曲に言ひあらはされ過ぎてゐると私は思ふのであるが、若しこの関係が明白になれば、プロレタリア文学の存在理由が少しでも薄弱になると思ふなら、それは甚だしい誤解である。といふのは非常に簡単な理由からである。即ち、私たちは、階級と階級とが、

抑圧者と被抑圧者といふ形で対立してゐる社会をそのまゝにしておいて文学をたのしむよりも、一時文学そのものゝ発達には、多少の障碍となつても、階級対立を絶滅することを欲するからである。他の一切を犠牲にしても、切迫した政治的必要を満すことを欲するからである。このことはブルジョア文学の発生の場合にも完全にあてはまる。ブルジョア階級が、その覇権へむかつて進出したときの進行曲として、政治的文学をもつたこと、そしてブルジョア革命のまつ最中には、歴史的に見れば一時文学の衰頽期を現出したこと等が、それを語つてゐる。ブルジョア文学は、愛と平和との

中に、静かな朗らかなクラリオネットの音の中に発育したものと思ふのは大間違ひで、血と闘ひとの中から戦ひとられたものである。

そして勃興期のブルジョア階級によつて、血によつて戦ひとられた文学が、国民文学として、成熟期のブルジョア階級の手で、まるで、平和と愛とのシムボルのやうに祭られてゐるのである。ゲエテ、シルレル、ユゴオ等々がそれである。勃興期のブルジョアジーは、一つの階級でなくて人類を代表してゐた。その故にこの時期の文学は人類の文学となり、国民の文学となり得たのである。といふのはプロレタリアが、階級とし

てはつきりと対立して来たのは、そしてブルジヨアジーがその階級的性質を露骨に示して来たのは、それ以後の出来事だつたからである。この意味に於いて、勃興期のブルジヨア文学は、ブルジヨアジーによりも寧ろより多くプロレタリアに属している。（メーリンクのレツシング論はこの点で私の主張を裏づけるであらう。）序でに一言しておけば、日本の国民は国民的クラシツクの名に値ひするやうな作家や作品をもつてをらぬ。紅葉、露伴、逍遙、蘆花、漱石、独歩――これ等の作家のうちで、これこそ近代日本を代表する作家であるといへる人はない。それは偶然日本に天才的作

家が現はれなかつたことにもよるであらうが、いま一つは、日本のブルジヨアジーが十分革命的階級としての闘争を経過しないで、封建的勢力と妥協して、その庇護のもとに発達して来たからである。

二

プロレタリアの勝利のために貢献するといふことが、マルクス主義文学の評価の基礎とならねばならぬこと

は上述の説明によりて明かになつたと思ふが、マルクス主義文学も、文学である以上それだけでは不十分である。共産党宣言が最もすぐれた芸術品であるとは言へないからである。

そこで、この根本原理に附随する、さまぐな小さい原理が必要になつて来る。たとへば、文学作品はたゞある政党の綱領を解説するやうなものではなくて、新しい何物かを創造してゐなければならぬとか、或は、或る観念を露骨にあらはした作品はよくない作品であるとかいふ種類の小さい原理がそれである。これ等の諸原理はマルクス主義にも、政治にも関係のない、一

般に芸術そのもの、若しくは文学そのものに関する原理である。こゝに於いてルナチャルスキーのテーゼは、そして一般にマルクス主義的文学の理論体系は、かくの如く二つの部分――政治的部分と芸術的部分とから成立してゐるのであることがわかる。しかもこの二つの部分はいゝ加減につきまぜてあるのではなくて、政治的部分が絶対上位に立ち芸術的部分は下位にたつといふ風に結合されてゐるのである。この結合のしかたをかへることはマルクス主義文学の名に於ては許されないのである。

このことは多くの実際問題に関連してゐる。たとへ

ば、政治的原理と芸術的原理とを同じ平面に並べて、双方に同じ価値をもたせようと企てるとき、そこに折衷的理論が生れる。ある作家の或る作品は、闘争的精神も、階級的イデオロギイも稀薄であるが、芸術品としては立派な作品であることがあり得る。だがこの場合、如何なる芸術的な価値をもつてしても、マルクス主義文学である限り、闘争的精神の欠如の埋め合せにはならぬであらう。第一義的な、根本的なものを欠いてゐる限り、それはマルクス主義文学の作品としては低く評価されねばならぬであらう。

又或るマルクス主義者、たとへばトロツキーが、政

治的には全く価値のない詩をつくつたとする。河上肇博士が、花か虫かを見て政治と没交渉な俳句を一句詠んだとする。この場合、トロツキーや河上博士がマルクス主義者であるがために、それ等の人の作品が、すべてマルクス主義文学の作品であると考へるのは全くあやまつてゐる。況んや、或る作家が、マルクス主義的芸術団体に加盟したら、その作者の前日までの作品はすべてブルジヨア文学作品であつたのが、その翌日からとんぼ返りして、悉くマルクス主義的文学作品になるなどゝ考へるのは全く子供らしい考へかたである。マルクス主義の立場からする文学批評は、常に、先づ

政治的見地からされねばならぬであらう。この意味に於いて政治的意識の弛緩は、マルクス主義文学作家にとつては致命的である。「イデオロギイはあやふやになつたけれども、技巧に於いてはすぐれて来た」といふような評語は、マルクス主義作家にとつては少しも名誉ではない。それは一つの芸術家としては、その作家が前進したことを意味するけれども、マルクス主義者としては後退したことを意味するからである。

だが問題はそれだけでつきるのではない。以上はマルクス主義作品に対するマルクス主義批評の関係について言つたのであるが、マルクス主義批評は、マルク

ス主義作品ではない、広く一般の文芸作品に対してどんな態度をとるべきであるか？

厳密に言へば、非マルクス主義作品の政治的価値は、マルクス主義的評価によれば零であり、反マルクス主義作品の価値は負になるわけである。たとへば「古池や蛙とびこむ水の音」という芭蕉の句は、マルクス主義的評価によれば、価値は零であると見なさねばならぬ。然るにすべての作家はマルクス主義者であるとは限らないのであり、マルクス主義の何たるかを全く解しない作家が沢山ある。

この場合、マルクス主義批評家は、厳密にその機能

をはたさうと思へば、これ等の作品に対する評価をさし控へねばならぬ。そして厳密には批評家といふ立場をすてゝ、分析者としての立場にたゝねばならぬ。プレハノフやレーニンの「トルストイ」評には、多分に（全くではないが）分析者としての姿が現はれてゐる。若しこの場合に、政治的な尺度をすてゝしまつて、たゞの表現や形式の批評だけをするならば、その時、この批評家は、マルクス主義的批評をしてゐるのではなくて、たゞの文芸批評をしてゐるわけである。

　更に一層進んで、反マルクス主義的思想を強くあらはした作品に対しては、マルクス主義批評家は、たゞ

その作品にあらはされた思想と戦ひ、その誤謬を指摘し、克服することに全力をつくさねばならない。そしてそれ以外のことに関心する必要は少しもない、もしかゝる反マルクス主義的作品の美に心ひかれ、その芸術的完成に恍惚とするのあまり、それを賞揚するなら、マルクス主義者はそこに退場して、たゞの文芸批評家と交替したと解釈しなければならぬ。

私の説明はあまりに機械的であり、非実際的であつたことを私は知つてゐる。だが、それは、私が原則的な理論を説明したのだからに外ならぬ。原則を説明する場合には、最も典型的な、従つて最も極端な実例を

あげるのが理解に最も都合がよいのだ。

　最後に私は、私自身の、所謂「懐疑的」立場を便利上逐条的に明かにして大方の教へを乞ふことにしよう。特に私の最も尊敬する蔵原惟人、勝本清一郎の両氏に私は教へを乞ひたいのだ。

　先づ第一に現在のマルクス主義文学理論に対して、懐疑的態度をとつてゐるといふ事実を告白しておく。（だが念のためにことはつておくが、私は何から何まで真理を疑ひたがるスケプチツクではないのである。懐疑家といふ言葉が、スケプチツクの訳語になつてゐるので、誤解されることを恐れてこのことを一言して

おくのである。）

第二に、私はマルクス主義の一般理論に対しては私の知るかぎりでは（それは非常に狭いのであるが）懐疑的態度をとつてゐるわけではない。私は、マルクス主義と文学作品の評価との関係の問題に対して懐疑的態度をとつてゐるのである。こゝでも私は一言しておきたい。といふのはかやうな新しい、未解決な問題に対して疑ひをもつことは、一般に理論家にとつて已むを得ないことであり、それは悪いことではなくて、却つて望ましいことであり、反対にあまりにはやく不完全なオーソドツクスを定立することこそ避くべきことと

であると私は思ふのだ。

第三に私は前に長々しく述べきたつた政治的価値と芸術的価値との二元論を脱することができない。尤もこゝでもことはつておかねばならぬことは、「芸術的価値」といふ言葉であるが、これを私は神秘的な、先験的なものだとは解してはゐない。それは社会的に決定されるものだと信じてゐる。たゞマルクス主義イデオロギイや、政治闘争と直接の関係をもたぬと信ずるまでゞある。

第四に、それにも拘はらず、私は文芸作品を批評するにあたつて、私の解釈するやうな意味の純然たる政

治的評価にのみたよるわけにはゆかない。このことはマルクス主義の一般的理論の真実性を認めた上でのことである。マルクス主義の真実性を認めながら、私は非マルクス主義作品のもつ魅力にも打たれる。そしてその魅力に打たれる以上はそれをありのまゝに告白するより外はない。この点が最も重要なのであるが、若し私の言つたことが真実であるならば、政治的価値と芸術的価値とは遂に「調和」し得ないと私は信ずるのである。両者を統一する芸術理論はあり得ないと信ずるのである。マルクス主義文学理論は両者の統一ではなくて、政治的価値に芸術的価値を従属せしめ、これ

をそのヘゲモニイのもとにおかんとするものである。両者は力で、権威で結合せしめられるのである。

若しさうであるならば、私は、現在のマルクス主義芸術理論は、一つの政策論であり、政治論であつて、芸術論と名づくべきものではないと信ずる。だから、幾分寄木細工的な感ある現在のマルクス主義芸術論を解体して、政治的部分と芸術的部分とに還元し、これを明白に規定しなほす必要があると思ふのである。もしマルクス主義芸術論が、完全な芸術論であるならば、ファシズム芸術論も、イムピリアリズム芸術論も同じ権利をもつて可能なわけである。久野豊彦氏が、マル

クスの代りに、ダグラスをひつぱり出して来たことも亦当然認められねばならぬ。そして芸術の評価は、芸術と関係の少ない、千差万別の尺度をもつて行はれねばならないことになる。だが芸術評価の尺度が観音様の手のやうに沢山あるといふことは、芸術作品の評価が不可能だといふことゝかはりがない。

これに反して、マルクス主義者は、政治的尺度によりて芸術作品の対社会、対大衆的効果を評価するのであるとすれば、この問題は至極簡単明瞭に解ける。これは政策論である。だが、人類の幸福のための政策論を、芸術の名によつて拒むことはできない。

これを要するに、マルクス主義芸術運動は、芸術に関する定義の塗りかへや、芸術的価値と政治的価値との機械的混合によりて行はれるわけには決してゆかない。それは飽くまでも政治のヘゲモニイのもとに行はれる運動であり、政治によりて芸術を支配する運動である。この関係は政治と芸術との弁証法的統一といふやうなあいまいな言葉で説明してうつちやつておくべきものではない。先づ一応両者を区別し、それを当然さうであるべき関係におかねばならぬ。

従つて、マルクス主義文学は――少なくもプロレタリアの勝利のために貢献するといふ意味に於けるマル

クス主義文学は——一定の時期において、その特殊性を自然に失つてしまふべきものであることは自然の理である。そのためにマルクス主義文学の価値が減弱するものでないことは、もう一度繰り返していふが、勿論であるけれど。

〔昭和四年三月「新潮」〕

底本：「平林初之輔文藝評論全集　上巻」文泉堂書店
１９７５（昭和50）年5月1日発行
入力：田中亨吾
校正：土屋隆
２００４年11月２日作成
２０１１年４月14日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。